

コンクリート魚礁を利用した一本釣漁業
－魚礁での釣り技術の習得を目指して－

八重山漁業協同組合
橋本貴臣

1. 地域及び漁業の概況

私の住む石垣島は、沖縄本島の南西に位置し、周辺にある西表島等も含めて、一般には八重山地域と呼ばれており、広大なサンゴ礁に囲まれた風光明媚で自然の豊かな島である。人口は、4万4千人程度であるが、ここを訪れる観光客は、年間50万人を越えている。

私の所属する八重山漁協は、組合員数約600名(うち准約100名)を擁する県内でも最大規模の漁協であり、一本釣や曳縄をはじめ、実に様々な漁業が営まれている。平成9年の漁獲量は約2,300トン、生産額は約16億8千万円となっている。

2. 課題選定の動機

私は、東京の伊豆大島に生まれ、一本釣漁師の子供として育ったため、小さい頃から父親の船に乗り、漁の手伝いをしていた。高校卒業後は一時就職していたが、その後バイクで日本中を旅することになり、北海道では昆布漁やサケ漁の手伝いもやっていた。旅の途中で石垣島が釣りのメッカだと知り、その魅力に惹かれてこの島にやって来た。島に来て5、6年はルアーでミーバイ(ハタ類)を釣ったりして生計を立てていたが、ある時バヤオ(浮魚礁)にマグロを釣りに行った際、船頭と知り合いになり、その後その船に乗って漁の手伝いをするようになった。2年程船に乗ったが、船頭が漁業を引退することとなったため、思い切ってその漁船(4.8トン)を買い取って独立することにした。

船を購入した時点では、未だ私は組合員ではなく、また組合員に知り合いもいなかったため、准組合員になるための水揚げ基準を確保するために大変な苦勞をした。准組合員になった後は、さらに水揚げ増大に頑張り、また仲間の支援もあって正組合員になることがやってきました。現在、正組合員になって1年3ヶ月目であり、漁協の一本釣研究会の役員もやらせてもらっている。

しかし、2年間の乗組員としての経験はあるものの、一本釣のやり方や漁場についての知識は十分に習得できなかつたため、殆ど一からのスタートとなった。最初は手探りで海図などを頼りに漁場に目星を付けて、高級魚であるアカマチ(ハマダイ)を狙っていたが、思うような成果は殆ど得られなかつた。そのため、漁法が簡単なグルクン(タカサゴ類)釣りを先行収入を得ていた。その内、グルクンの漁場で、これを生き餌として高級魚であるアカジン(スジアラ)釣りを始めるようになり、その後、漁場を探しながら転々とした。

私の船には、その当時八重山では珍しかったスパンカーを装備していたため、潮が速い漁場でも素早くポイントに仕掛けを落とすことができた。そのため、他の船がやっているアンカー釣りに比べて機動力のある釣りができ、一般の漁船が利用出来ないような漁場も随分開拓することができた。最初は水深40m～50mを主な漁場としていたが、徐々に好漁場を

求めて深場に移動するようになり、色々な根を探索している内に、水深85mの所で魚礁らしき物を発見し、試しに流し釣りで仕掛けを落としたりしたところ、アカジン等を豊漁することができた。更に周辺を魚探で探したところ何カ所かの魚礁を発見し、何れもかなりの釣果を得ることができた。

4. 研究・実技活動状況及び成果

そこで、県の水産事務所へ行き、八重山海域の全ての魚礁位置を調べたが、示された位置に行ってみても魚礁はなく、それを探し当てるのに多大な労力を要することとなった。県内では本海域を含め、沢山の魚礁が沈設されているが、魚礁の正確な位置が十分周知されていないことや、テグスやアンカーが魚礁に掛かって操業できない等の理由で、殆どの魚礁が利用されていない状況である。現在、私が位置を把握し、利用している魚礁は25カ所程度あり、その水深は65m～90mくらいである。また、魚礁は大半が2mの角型である。

魚礁での釣りで注意すべきことは、釣った魚がブロックの中に逃げ込みブロックに付着しているカキ等でテグスが切られてしまうことである。私も最初の内は10匹かけて、その内1、2匹しか漁獲することが出来なかった。そこで、テグスを30号から40号の丈夫なものに替え、また逃げ込み防止のため、仕掛けを深く降ろさなくて済むように親子サルカンから重りまでの捨て糸を通常よりかなり(2尋)長くし、魚礁と釣り針との距離を離すことにした。また、こうしておくときでもテグスを送り込むことによって、仕掛けを一点に留めて置き、喰い渋る魚を釣ることができるというメリットもある。ただし、この方法だと重りを根掛かりで紛失することも多い。

このように工夫はしているが、それでも、まだ半分はテグスを切られており、研究の余地が多く残されている。本土では色々工夫されていると思うので、今後大いに勉強したいと考えている。

前に述べたようにアカジン釣りには生きたグルクンが必要であり、その数は1日に30尾以上を必要とするが、冬季になると生き餌の確保が困難である。そこで冬の間は、魚礁にアンカーをかけた石巻き落とし漁も試してみたところ、シルイユ(シロダイ類)等のこれまで釣れなかった魚が釣れるようになった。魚礁漁場ではアンカーが魚礁の中に入り込んでしまい、はずせなくなったりするが、私の船の場合アンカーの上げ下げを操舵室で出来るようにしているため、あまりアンカーを切らずに済んでいる。

魚礁には平積みと山積みがあるが、アカジン等のハタ類は山積みの方が圧倒的に良いように思われる。ただ平積みの場合でもシルイユ等が付いており、この場合、ブロックに逃げ込まれることが少なく、テグスが切られにくいことが利点と言える。また、魚が良く付く魚礁とそうでない物があり、何故そうなるのか研究してみたいと思う。

ここで私の平成10年度の漁獲実績について見てみると、年間の総漁獲量は約2.3トンで、その内魚礁漁場での水揚げは450kgもあり、魚礁への依存率は約20%となっている。魚礁で漁獲されるのはアカジンが最も多く約6割を占め、次にその他のハタ類が約2割で、ハタ類だけで8割を越えている。このように魚礁で漁獲される魚は高級魚が多いため、漁獲金額に占める魚礁への依存度は30%を越えているのではないかと判断している。また魚礁利用状況を月別に見ると、生き餌の確保の容易さや天候あるいは遊漁船業を営む時期があることにより、4月～7月と2月が利用率が高く、8月、11月、12月は全く利用しない状況となっている。

5. 波及効果

私のように魚礁での釣りを少し工夫すれば、比較的安定した漁獲が得られるようになり、この漁法が普及すれば、魚礁の利用拡大等、その波及効果は大きいと思われる。

6. 今後の課題や計画と問額点

私が魚礁漁場を開拓してから3年にしかならないが、それでもその間に、魚体の小型化(アカジン3~4kg→1kg程度)が見られ、資源の減少が危惧される。これから先の漁業を展望すると将来に悲観的にならざるを得ないが、それでも現在500人の漁業者が海で生計を立てている現実を考えると、何らかの資源管理をしていく努力が必要だと思われる。

しかし、現在の法律では、一本釣りは基本的に自由漁業であり、どこの海でも操業できることになっており、八重山の漁業者がマチ類の禁漁区や期間を設けても、他地域から来て操業することが可能な制度になっている。資源管理の実効をあげるためには、苦勞して管理した者が報われる制度にすべきだと考える。例えば沖縄は広大な海域を1海区として取り扱っているが、地先漁業者が管理できるように複数の海区に分けるとか、地先が行う管理内容を部外者にも守らせる方法を考えると何か対策が必要があると思うので、今後一本釣研究会として積極的に行政等へ働きかけていきたいと考えている。

また、漁業圧力の分散や漁家収入の向上のために、海の多面的な利用も青壮年部で検討しており、サバニ(沖縄のくり船)クルーズや遊漁、ダイビング案内等の事業を積極的に展開することにより、八重山の漁業に大きく寄与できると考えている。

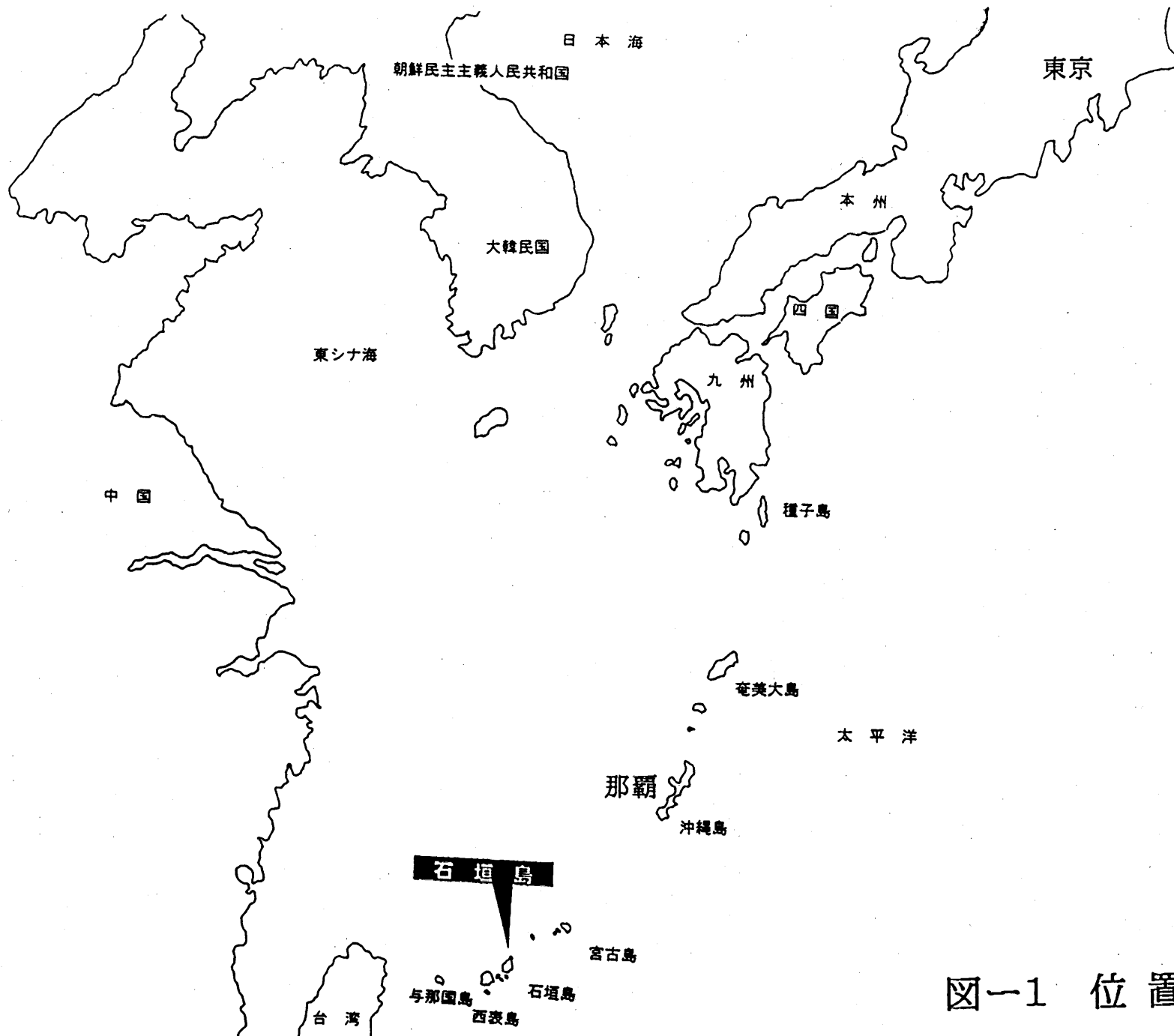
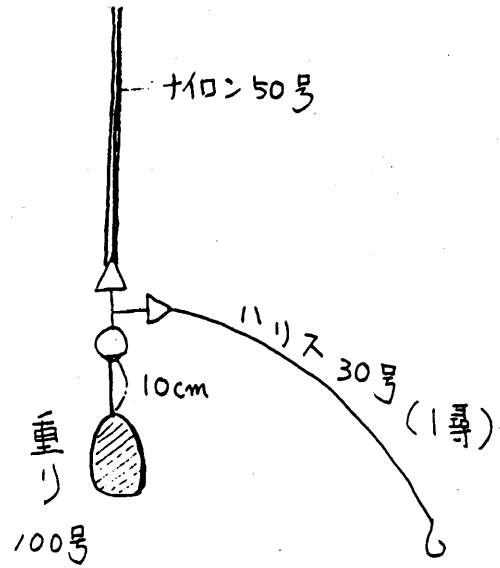
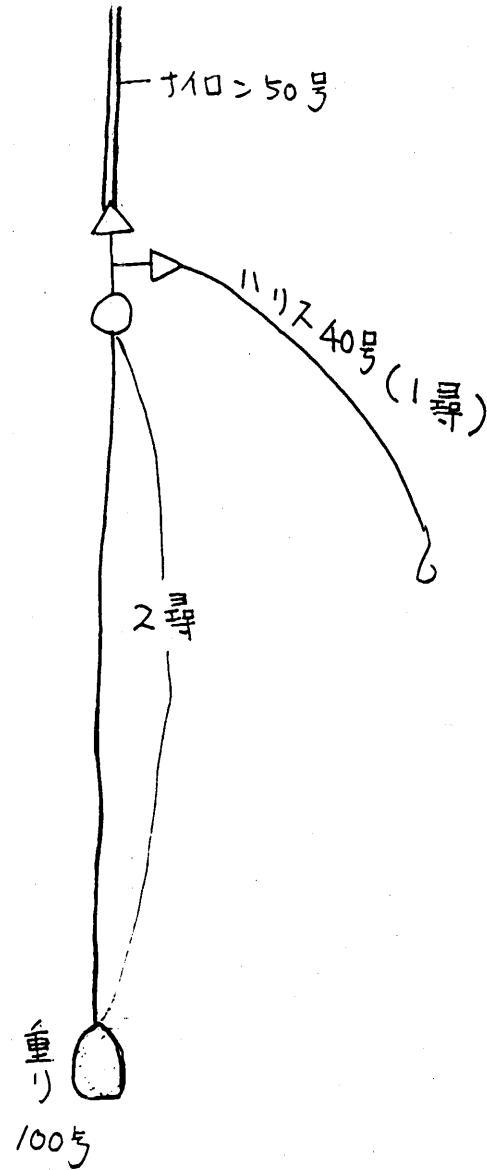


図-1 位置図

従来型



改良型



図一3 仕掛の比較

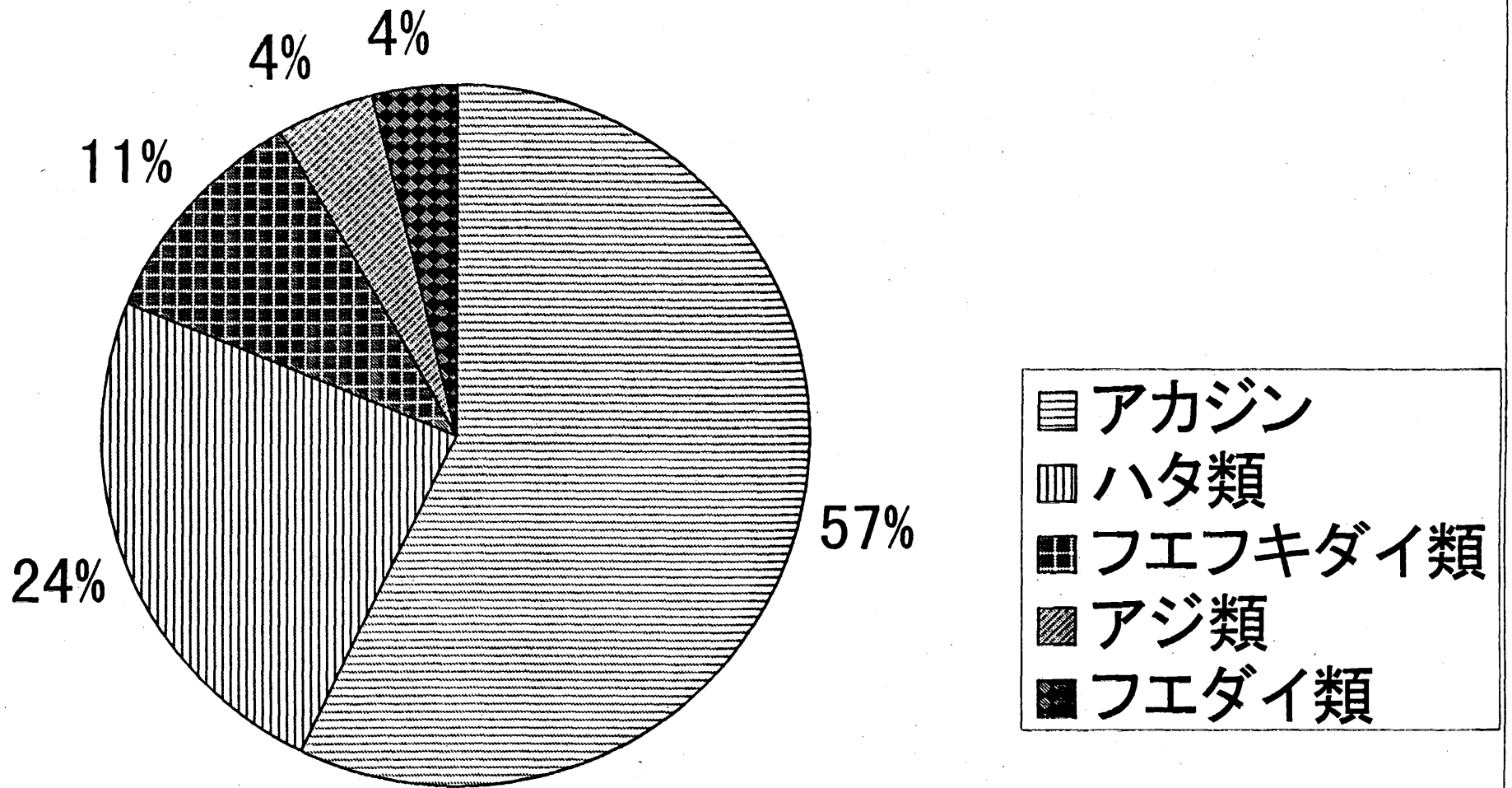


図4 魚礁漁場での魚種組成

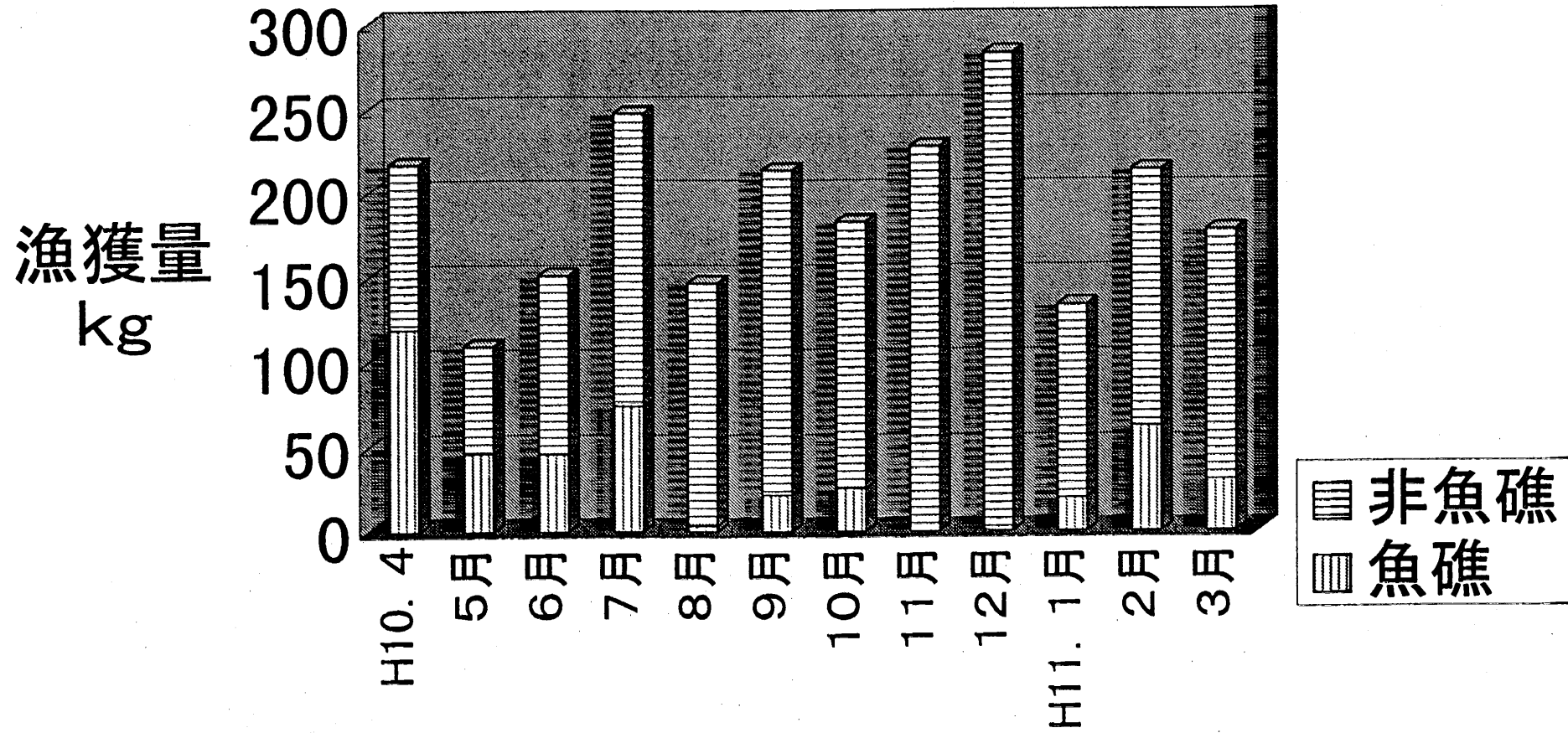


図5 月別魚礁・非魚礁別漁獲量